

研究ノート・
体験報告

言語教育私見

李 永 寧

Reflect on Educational Language

Lee Yong-ning

Through the practical language education, the writer mentions his personal opinions about the educational language.

私の日本語教育という実践をふまえて、①教育言語、②聞くこと、③話すこと、④書くこと、について私見を述べたい。

①教育言語

“フランス人には、フグを食べられる、とは考えてもみななかった……”。これは、最近見たNHKテレビの番組である。日本に来たバリのシェフ(chef)が、フグ料理の調理場を見て、ふともらした感慨をアナウンサーがつけた日本語であった。

英語などの影響で、“フグを食べられる”、“お茶を飲みたい”、“外国語を嫌いだ”、“美人を好きだ”という言い方が定着しつつあり、そういうことでいままでの日本語にない独特のニュアンスが言葉に出てくるという効果はある。しかし、教育言語としては、オーソドックスな、“フグが食べられる” etc. とするのが妥当であるように思われる。

北京の大学で日本語を教えていた頃、ナマの日本語を、という趣旨で、NHKのニュースや番組を傍受し、それを文字化して、その録音テープと共に教材として学生に配った。現代日本語にNHKの果たした役割は否定出来ない。しかし、そのスタッフとしてのアナウンサーで、スゴイ御仁がときどき居る。“アラブ諸国”と言うべきものを、“アブラ諸国”と言っていた。いくら産油国でも、そう呼んではまずい。おかしいアクセント、おかしいイントネーションはザラにあった。

言葉のプロとしての語学教師は、NHKのアナウンサーと同様、言葉に対する厳しさを要求されても文句は言えない。学ぶ側としては、教える側の間違った音やアクセント、イントネーションを一生背負い込むことになりかねない。コワイことである。教師として生身の人間、ごく初歩的なことで誤ってしまうことはしばしば。その時は、“過っては則ち改むるに憚ること勿れ”で、あっさり訂正したらいい。“後生畏る可し”で、こうした文法上、発音上のミスは、往々にして教わる側から指摘されるし、意外と教わる側から難しい質問をされて考え込んでしまうことがある。つまり、教える側が教えられる側からヒントを得て、いろいろと教えられるのである。そういうわけで、教師の側としても、“三人行、必有我師”（三人いれば、その中に必ず一人は私よりすぐれた人がいる）という命題が成立する。

教育言語では、ごく普通に使われている、ごくあたりまえな言いまわしを使ったり、教えたりしたらよいと思う。

こんな例があった。ある先生、学生に、“‘皆さん、皆様方’の外に‘おのおの方’という言い方がある！”と教えた。たしかにそうだが、それでは困るのである。それは、鞍馬天狗や近藤勇、土方歳三の時代で、“おのおの方、ゆめ、ゆめ、油断めさるな！”とか言った、言語的な骨董品なのであるから。幕末の剣客土方（ドカタ?!）さんも、今生きていたら笑い出すだろう。

ショーもヘミングウェイも、ごくごくありふれたやさしい言葉ですばら

しい作品を書いている。教育言語も、ごくごくありふれたやさしい、あたりまえな言葉を使うべきである。

②聞くこと

聞くことは、言葉を修得する基本中の基本である。実は人間、生まれ出る前から、母の腹の中でじっと言葉を聞いて来たのである。音楽家の子供は、生まれ出る前から、じっと音楽を聞いているわけである。それで、日本人の子供は日本語がうまい、音楽家の子供は音楽がうまい。“胎教”という裏打ちがあるからである。生れる前から、“やって来た”のだから。

外国語修得のために、出来るだけ多く正しい外国語を聞くこと。音楽を志す人は、名曲を多く聞くこと、同じ理屈である。多く聞くことによって、外国語特有のリズムを体得出来るし、そうすることによって、個々の単語はわからなくとも全体の話がわかるような気になる。

一番難しいのが、電話による聞き取りである。外国を旅行してホテルなどに泊って、電話がリンリン鳴り出すと、受話器を取るのが恐い。それに比べると、ホテルのボーイがトントンとノックして用件を聞きに来た時は、何かホッとす。受話器やイヤホンから聞こえる言葉は、機械を通して肉声とはだいぶ違った“音”である。それに対して、ボーイさんの言葉は、人間の共通した喜怒哀楽がもり込まれた“声”であり、ボーイさんの表情やゼスチャーがついているので、理解しやすい。

ちゃんとした教育を受けた外国人の話す外国語は、わかりやすい。“ちゃんとした”とは“常識的”ということであり、“規格的”ということであり、“論理的”である、ということである。あたまの方を聞けば、あとは何を言わんとしているのかが推測出来る。一隅を挙げてくれれば残りの三隅は察しがつく。考古学者は、数片のかわらけで、器全体の形を再現してくれる……、同じ道理である。

ちゃんとした教育を受けていない人の話すはなしは、分り難い。“思路”（考えの筋みち）がメチャクチャで、次にどんな言葉が出て、どんなことを言いたいか、聞き手にはつかめない。

正式の場でのスピーチの通訳を務め上げるのは、比較的やさしい。相手が半分しゃべっているのを聞けば、残り半分は、何を言い、どんな言葉が出てくるか、おおよその見当が付き、先回りして翻訳してしまうことも出来る。通訳が終ったのに、まだしゃべっている、というのをよく目にする。

日本の子供向けのアニメ“一休さん”が北京では大もてである。その主題歌も、北京の子供の間で盛んに歌われている。そのはじめの部分、“好き好き好き、すきーすき、一休さん”の“好き好き好き好き、すきーすき、”が3通りに発音されている。①ズキズキズキズキズキーズキ②キチキチキチキチキチーキチ③ケチケチケチケチケチーケチ。鼓膜の柔軟な、聴覚の感受性のよい子供がこうなのである。

遣隋使、遣唐使等の時代に派遣された留学生は皆、当時の語学のエリートであったと思う。そうした人たちが伝えた漢字の音も、時としては、相当なずれがあったのではないかと思われる。中国の文化圏の時間および地理的変遷を考慮に入れても、現代漢語と現代日本語の漢字の音の違いは、古代の日本の留学生という漢字音読のメディアの多少のくるいから来たのではないか。

“エ?!”と言って相手に聞きなおした経験をお持ちであると思う。はっきりとした声で相手が話してくれたのに、である。それは、④トンチンカンで辻褃の合わないことを言われた場合、⑤思ってもいなかったことを口走られた場合、⑥聞き手が相手の話していることに注意を払わなかった（つまり、言葉の音と、その音の内在する意味についてあたまを働かせなかった）場合、が原因だと思われる。

気心の知れた間では“ツー”“カー”で意思が通じる。初々しい恋人の間

では、目は口ほどにものを言う。老夫婦の間ではよく、“おい、あれをとってくれ” “はいはい” という会話が交わされる。

聴力とは、声または音をメディアにしての意味のキャッチなので、ただ音に頼っていたのでは、その音の意味する内容を正確につかむことは難しい。相手の言語習慣、生活習慣、思考方法等のもろもろの要素を把握し、自己の思考の論理性を動員して、アタマで相手の言わんことを、はじき出すのである。つまり、アタマで聞くのである。このことは、言葉という形式の第一義的な存在である“音”を無視せよ、ということでは絶対ない。むしろ、その音をしっかり聞きとることである。その上でのアタマというコンピューターの処理である。

標準とされている言葉を多く聞くこと。そしてその個々の単語の音を正確にとらえるよう努力するばかりでなく、その言葉独特のアクセントやイントネーションからなるその言葉のリズムをとらえることに努めること。そのリズムをとらえることによって、はっきり聞こえなかった単語の音が割り出せるようになる。

言葉を聞く場合、“音”とは関係のない諸要素を入力して、アタマというコンピューターを働かせること。アタマの閃きの速度が速いか、光の速度が速いか、私にはわからない。しかし、アタマの閃きの方が音の速度より速いのは確かだろう。アタマというコンピューターではじき出した結果を持って音を待ち伏せるのである。つまり“ピカ、ドン”である。ベテランの同時通訳の方がスピーチをしている人よりはやく終わってしまう場合があるが、そのためである。

③話すこと

話すことの裏打ちとなるのが、“聞くこと”によって得られた聴力である。“話すこと”とは、“聞くこと”と裏腹な実践行動である。

とにかく、努めて多く話すべきである。間違えてもかまわない、笑われてもかまわない、という決心と勇気が必要である。“完璧な発音、完全に正しい使い方(文法)”などということ望まないこと。自分の母国語を話したり、しゃべったりすることを職業としているアナウンサーでさえ、誤った発音をしたり、変な言い方をしたりするではないか。

その際注意しなければならないのは、聞いてくれる相手を持つことである。自分で発音し、自分の耳で聞いて正しいと思っているものが案外ダメなことがある。“生活が日に日によくなって来ました”の“日に日に”が“キニキニ”となっていたり、“銃”が“チュウ”になったり、“有難う”が“アリアトウ”などとなっていることがよくある。そういう誤ちをなおしてくれる聞き手が必要である。自分の発音上の欠点を指摘、矯正してくれる相手とは、必ずしも正式の教師でなくともよい。自分の欠点は外の人がよく気付いてくれるものである。

“素読”というものの伝統のある中国の大学生は、日本語などの外国語を勉強する時も、大きな声を出して朗読する。全寮制なので、朝のまだ暗い中をグラウンドでテキスト片手に声を張りあげている学生をよく目にする。これは、話すことの練習である。実際に発音してみて、自分の耳でたしかめるといふ言語習得のための基本的なレッスンである。ただ、その際注意すべきことは、外国語だから、教師の発音そのまま、またはテープの発音そのままそっくりまねるよう努めることである。母国語にそっくりな発音は外国語には少ない、と思った方がいい。似ていると思っても、実は微妙に違う。外国語は外国語としてそのままそっくり学ぶようにすべきで、外国語の発音を母国語の音で“フリガナ”をつけてはいけない。

④書くこと

“書くこと”と言っても、別に、のっけから、外国語でまとまった内容

の文章を書け、と言うことではない。それは無理な話しである。頑張っても書いてもらっても、それを添削して直すとすると、教師としては大変な仕事量となるばかりで、学生の側からしても、たいしてためになってはいない。労多くして益少なし。

外国語での作文は“借文”なのであって、自分勝手な“文章を作る”のではない。ある議員さんがアメリカの政治家に“*My face don't stand!*”（そいじゃ、オレの顔が立たねえ!）と言ったと言わなかったとか。その真実の程はわからないが、こんなやり方はマズイ。

それぞれの言語にはそれぞれ独特の言いまわしがある。そのネイティブな文章をそのままお借りして言い換えて自分の言いたい内容を盛り込むのである。しかしその際注意しなければならないのは、時としては言い換えの通用しないこともある。“こういう内容をこの言いまわしを応用してこう言い換えることは出来るが、こう言い換えても何を言っているのかわからない、ダメだ”と自信を持って言えるほどのレベルのある教師は残念ながらあまり居ない。文法的には合っているが、出来上った文章は通用しない……ということもある。

言語というものは生き物のように時代と共に変わるもの。“チャリンコ”とは以前、子供のスリのことを言った。それが今では自転車のことをさすようである。“おのおの方”とは、鞍馬天狗の時代には使ったかも知れぬが、今は使わない。現在では“おもしろ言語学”、“面白ゼミナール”、“面白道具”、“面白授業”と語幹を形容詞の連体形にかわって使う。以前は元気だ、健康だ、からだの調子が悪い、と言っていたものを現在では、“体調がいい”“体調を崩す”と言っている。“本当?”と言っていたものを、現在では“ウツソー!”と言う。

言語に関しては、“初めに音ありき”である。文字を持たない言語はあっても、音声を持たない言語はないのではないかと思う。文法的には正しく

でも、そうは言わない、ということがあって、困ったことがよくあった。それは主に書き言葉の場合であった。その一方、話し言葉として立派に通用している言い方で文法的にどうとも解釈出来ないものにつかかって困った時もあった。しかし、私は話し言葉もしっかりした法則を持っていると信じている。

言葉の習得は、幼児に見るとおり、耳で聞き、口で話すコミュニケーションからはじめるのが自然な順序である。そして教える側からとしても、学ぶ側に話しことばの法則を教えなければならない、と思っている。聞くこと、話すこと、書くことの相互間の有機的関連に気を配りながら。